

京大人文研

共同研究班が読み解く

世界史

第1次大戦から100年

王寺 賢太

社会思想史



おつじけんた 1970年、ドイツ生まれ。京都大人文科学研究所准教授。著書に『Ennoverlirning - Iversel』(「債務共和国の終焉」(いずれも共著)など。

ソ連・東欧の社会主義圏が崩壊し、中国が資本主義化を遂げて四半世紀。「現存する社会主義」に対する批判や幻滅は、二〇世紀後半を通じてすでに左右両翼の常套だったから、その終焉自体はさして驚くに値しないことだったかもしれない。しかし、この四半世紀、資本主義のグローバル化とともに起こった動揺は、日本の例ひとつとっても、一時期の経済的繁栄と政治的安定が、どれ

こつた一九一七年のロシア十月革命だった。レーニンは革命によって打倒すべきものを、同時代の西欧で成立した「資本主義の最高段階としての帝国主義」に見ていた。

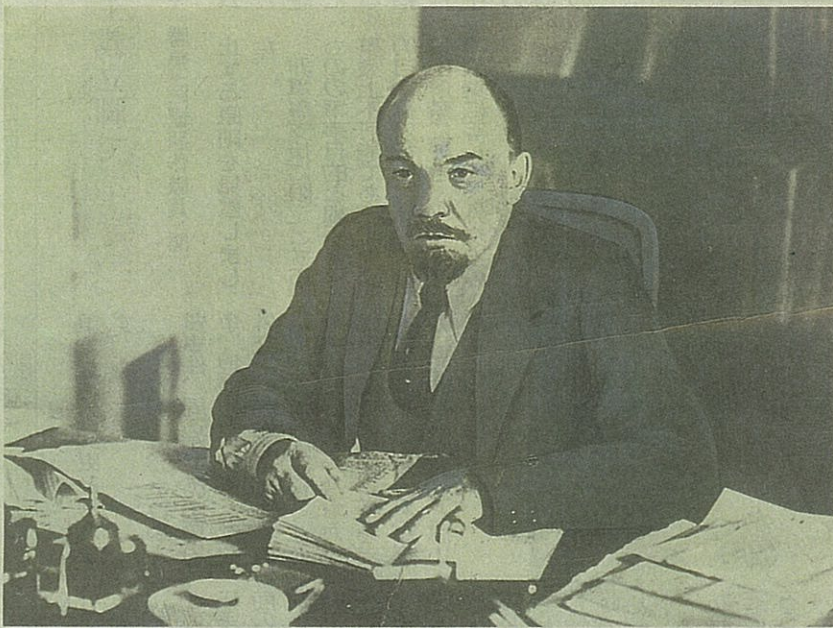
帝国主義はなによりも、重化学工業の発展とともに巨大化した産業資本(製造業)と、拡大した株式市場を通じて巨大化した金融資本(銀行)の結合のもと、国内市場

を支配する独占体の成立によって特徴づけられる。この独占体はさらに、マスメディアを通じて世論を左右し、国家の支配を通じて政治を左右する。レーニンにとつては、こうして成立した独占体と国家の複合体による世界市場分割の

あらわれが、一九世紀末以来の西欧列強の植民地主義であり、世界分割の完了がもたらした列強間の抗争こそ、「帝国主義戦争」としての第一次世界大戦にほかならなかった。

ロシア革命

ほど冷戦構造に保証され、社会主義圏の存在に支えられていたかを思い知らせている。その意味で、社会主義の亡霊はいまなお私たちの現在に取り憑いているとさえ言えるのだ。



ロシア革命をけん引したレーニン

人々の生活空間の隅々まで、世界の端々までが資本主義に覆われ、支配層によってなすがままにされている。レーニンが見ていたのはそんな資本主義のグローバル化の現状だったのだ。だからこそ彼は、戦時体制に与した西欧の社会民主主義者たちと縁を切り、いつさいの戦争協力を拒否して、帝国主義戦争から革命に至る道を探った。革命後のロシアが不利な条件を飲んでただちにドイツと講和を結び、第一次大戦の終わりの

世界を変革、社会主義の実験

始まりを画すのも、帝国主義列強のゲームから降りるといふ断固たる意志表示だった。だが、いっそう注目すべきことは、後進資本主義国ロシアで成立したプロレタリア革命が、先進資本主義国における階級闘争の激化の果てに革命を展望したマルクスに反する革命であったこと、そしてレーニンがそんな革命を実現することができた理由もまた、もはや世界を席巻する資本主義の支配と誰も無縁ではありえないという認識にあったことだ。二〇世紀を通じて、ロシア革命という出来事が、来るべき社会主義の夢とともに、資本主義の先進国であれ後進国であれ、労働者であれ非労働者であれ、多くの大衆を活気づけた理由もそこにある。社会主義の実験はたしかに無惨な失敗に終わった。しかし、かつてロシア革命が一瞬見せた輝きは、ふたたび現れたグローバル資本主義の外を探し求める者を、今後とも励まし続けるだろう。

次回回は3月21日掲載予定です。

- 1905年 日露戦争終結、ロシア第一革命
- 1914年 第一次世界大戦勃発
- 1916年 レーニン、亡命先で「帝国主義論」執筆
- 1917年 2月革命後、レーニンのロシア帰国。戦争体制の拒否と全権力のソビエトへの要求を訴える。10月革命成立
- 1918年 3月、ブレスト＝リトフク条約成立。ロシアは第一次大戦から離脱

大衆活気づける一瞬の輝き

筆者

特異な革命家

ロシア革命という出来事をどう理解するかは、二〇世紀を通じて歴史と政治をめぐる思想にとっての一大課題となった。ハンガリーの哲学者ルカーチは、資本主義

の全面化のもとで物扱いされる労働者が、プロレタリアートとして「階級意識」を持ち、政治的主体となるところに革命の起点を見いだした。他方、フランスの哲学者アルチュセールは、革命的状況を、経済的・下部構造の最終的な規定をうけながら、政治・文化などの

諸要因が複雑に干渉して成立する「重層的決定」によって説明する。レーニンはこの主客両面への関心をかねて、だからこそ両者の出会いを「革命」というかたちで実現させることができた特異な革命家であった。